
碧陽学園ね.....めんどくさい

レスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧陽学園ね……めんどくさい

【Nコード】

N8696T

【作者名】

レスト

【あらすじ】

この作品は作者の筆休めの作品です、なので更新は一定ではなく不定期になります。これは有り得たかも知れないifのお話、作者のもう一つの作品の主人公である水無月 悠夜が転生した先が生徒会の一存の世界でさらに原作の十年前だったら？という話です、原作のイメージを壊したくないという方や捏造が嫌いな方はブラウザ、戻るを推奨します。それでもいいや、付き合っただけよ、という優しい方どうぞ読んでやって下さいm()m

へいおんにすじしたい……（前書き）

はい、書いてしまいました（^ - ^）悠夜はこっちでは平穩に暮らせるでしょうか？

それでは

どーぞ

へいおんにすじしたい……

だりい、ひたすら怠い。何が悲しくて高校生をまたやらなきやならんのだ。いや、まあそれを言ったらなんで赤ん坊、幼稚園、小学生、中学生をやったんだって話しになるんだが…… はあ、意味わかんねえ。

ん〜？ 何言ってるんのかって？ まあ、あれだよ簡単にまとめるとな。転生しました〜 …… OK、その手に持っている携帯を一旦置こうか。頭が逝ってる訳でも精神があれな訳でもないからな？ いや、転生したって言ってる時点でおかしいと俺も思うが。残念ながら、とても残念なことに事実なんだよ。

転生した経緯を詳しく知りたいならもう一つの作品の第一話、二話を読んでくれ。

別に知りたくないならとりあえず、大学受験に行く途中で事故って死んだ後、気がついたら赤ん坊からリスタートしたとだけ考えてくれ。

で、だ。苦しかった赤ん坊時代を抜けて、面倒だった幼稚園時代をやり過ぎ、苦痛だった小学生時代を耐え忍び、最悪で災難で災厄で苦行で辛く厳しかった中学生時代を越えて、やっと、やっと高校生になったんだが入学して抱いた感想は変わらず怠いだった。

何？　なんかおかしかったか？　ああ、結局怠いのかよって？
違う？　中学生時代だけなんでそんなに酷いのか？

……それはな、あれだよ。ちよつと、いや、かなりめんどくさい奴と知り合ったというか、流れるに必然だったと言うか、不可抗力というか、世の中の不条理のせいで理不尽な目にあっただよ。

別に知り合った奴がめんどくさいって訳じゃないんだが。むしろ気が合う奴だと思うよ？　性格というか、スタンスというか、なんかそこら辺が似てるから話しやす……くはないか。なんか色々つぶっ飛んでるから若干話してて疲れるわ。

そいつ以外にも何人かと知り合ったが……そいつらはそいつらでめんどかったな、うん。ホントに……。

けどそつちも重要なんだが問題は周りだったな。あれはめんどくさった。いちいち絡んでくるし。

俺に絡むんじゃないかって本人に直接言えっの。……こつ考えたらやっぱあいつらがめんどくさいのか？

……頭痛くなってきたし考えるのは止めよう。

本当になんで俺があんな目に遭うんだよ。つーか転生させるなら記憶くらい消せよ。職務怠慢か神様？

ん、ダラダラ考えてる内に学校に着いたな。とりあえず入学した
てだからクラスの確認だ。えーと俺のクラスは、っと1 - Bか確認
終了〜さて行きますか。

俺は未だに自分のクラスを探している奴や同じ中学だったのかク
ラス表の前で雑談してる奴らの波から抜け出し、自分の教室に向か
った。

あん？ どの高校かだって？

いまさらな感じだが、確かに言っただけじゃなかったな。俺がこれから通う
ことになる学校は……。

私立碧陽学園だ。

へいおんにすじしたい……（後書き）

どうでしたか？ってこんなに短かったらわかりませんよね（^ -
^ ; ;

これからもたまに更新しますので気が向いたら読んでやって下さい
m (——) m

いけめんくんとあいつが……ふじつにすしせるよな？……（前書き）

何となく投稿）、キャラの口調は作者の想像ですがご容赦をm（

ー）m

それでは

どーぞ

いけめんくんとあいつか……ふつづにすこせるよな？……

……ふう、何とか間に合ったな、まさかチョップチャプスがきれるとは思わなかった、この辺はコンビニも少ないから行って帰るだけでも時間がかかるんだよ、そのせいで買いに行つて帰つて来たらHRぎりぎりの時間になった

……なんだよ、そんなもん帰りに買えつて？よし、ちょっとこつち来いや、チョップチャプスの素晴らしさを肉体と精神に刻み込んでやるから

んんっ！すまん少し取り乱した、確かに高校は怠いがあの中学の時の騒動やらなんやらから解放されたかと思うとモチベーションが上がつてみたいだ、大変だったからなあ、本当に

でもまあ、あいつと会うのもほとんどないだろうしなあ、それは若干残念？かねえ、性格は似てたしダウンーでめんどくさがりとなかなか気が合ったな……そのせいで厄介なことにも巻き込まれたが

つと、着いたけどなんかおかしい、普通新しいクラスつてもつと騒がしいと思うんだが今は全く騒がしくない寧ろ静かだな、なんでだ？いや一応話し声は聞こえるな、多分男の声だがそれしか聞こえん……まあいいや、とりあえず教室入るか

ガラガラ

ドアを開けて中に入るとかなり変な空間だった、俺が入っても誰も反応せずにクラス全員がある一角の様子を伺っている、いや別に自意識過剰なんじゃなくてHRの時間ぎりぎりに教室に誰か入って来たら視線向けるだろ？普通

それが全くなく窓際に座っている二人の男女に視線が向かっている、男の方は何と言つかあれだ、イケメンだ、しかも爽やか系の男女両方に受けがよさそうな、生粋のイケメンだな、で女の方は

………なんでお前がいんだよ、またかまたなのか、結局俺は普通に過ごせないのか？いやまだだ、まだ大丈夫だ、この中であいつと俺が知り合いたと知ってる奴はいねえ、他人のふりをしてやり過ごしたら大丈夫な筈だ

とりあえず空いてる席は………あいつの隣しかない、名簿の順じゃないのか？ああ、あれのせいかな、黒板に書いてある席は適当に座っ

てて下さいっていう俺に対する嫌がらせとしか思えない指示のせいか

あいつが座ってるのは窓際の1番後ろでその前に座ってるのは爽やかイケメン君、あいつの隣に座ろうとする猛者が居なかったんだな、まあ無理だよな、あいつに初対面で何かアクション起こすのは、そう考えるとあの爽やかイケメン君は凄いな、多分初対面なのに全く頓着せずに話しかけてるし……あいつがそれに対して反応しているかは別にして

さて、ぐだぐだ考えてても仕方ないしあいつが反応しないことを願って逝くか

スタスタ、カタン

……よし！多少見られたが普通に座れた、これでこのままHRが始まって何事もなくいけたら

「久しぶり、悠夜」

良かったんだけどなあ、そんなことある訳もなく……はあ

「……はじめまして」

俺が顔を背けながら初めて会いましたみたいな挨拶をしたらめっちや微妙な顔をされた、何言ってるのこイツ？って感じだな

「希咲はこの人と知り合い？」

「しよた「中学の時の同級生」……」

初対面って言おうとしたら先に潰された、普段めんどくさがる癖に何でこんな時だけ反応が早いんだよ

「そうなんだ、これから一年間よろしくな悠夜」

ニツコリと嫌味じゃない爽やかな笑顔で初対面の俺に挨拶をしてくるイケメン君。ナチュラルに名前と呼んできたけど訂正すんのも面倒なのでスルーだ、別にどう呼ばれようが関係ないしな

というか今のイケメン君の笑顔でこのクラスの女子の大半がほう、と熱っぽいため息をついていた……こいつに関わったら駄目だ、厄介事の気配がする

「……一年間よろしくイケメン君」

「なんだよイケメン君って、ああ！そうか名前言ってなかったな、俺の名前は植野 春秋って言うんだ、気軽に春秋って呼んでくれると嬉しい」

「分かった、植野だな」

「や、春秋って」

「植野だな」

「春あ」

「よろしく植野」

「……もう植野でいいです」

イケメン君こと植野君は諦めたように力無く了承した、中々おもしろいが深く関わるのはめんどくさそうだから絡まないようにしよう

……はあ、そろそろ現実逃避も限界か、しかたない

「久しぶり、って言っても一ヶ月ぶりくらいだったな希咲」

「そうだね」

なんとも形容しがたい顔でこっちを見て……傍目からは睨んでいた希咲にも挨拶する。なんかもはや普通の学園生活が過ごせない気がする、切実に

「ていうかお前引越したんじゃないのよ」

「ここから20分くらいのところに引越した」

「……まぎらわしい」

「どこに引っ越すかは言っていなかったか、そつちが勝手に勘違いしてたんだからぼくは悪くない」

「まあ確かに、でも何でこの高校なんだよ、お前の頭だったらもつと上の……いや、どうせ家が近いからとかいう理由だろうな、希咲だし」

「失礼な、その通りだよ、でもそれを言ったら悠夜も同じだろうに」

「あつてたのに何で俺は怒られたんだよ、それから俺にはこのレベルで限界だ」

これ以上勉強するのはめんどくさかったし

「相変わらずだね」

「お前にだけは言われたくねえよ」

と言い終えたところで担任らしき人が入って来て入学式をするために体育館にクラス全員で移動した、で今はおそらく何処の学校でも恒例の校長のやたら長い無駄話を聞いている。が、やはりというか、なんとというか、植野と希咲の周りの生徒は二人のことをチラチラと見て校長の話なんか欠片も聞いてねえ

そりゃそうか爽やか系イケメンである植野にあの希咲が近くにいないからなあ

ん？植野は分かったけど希咲の方はなんでかって？……：そう言えば言っただけだったな、あいつらの対処方を考えてたからすっかり忘れてた

まああれだ、簡単に言うけど、美人なんだよあいつは（この場合は美少女か？）……ただ美人なだけだったら良かったんだが希咲は美人の前に超絶とか付くクラスの容姿をしている

形容の仕方としておかしいと思うが美少女の天才とかそんな感じだ、それこそ植野君が霞むくらいのレベルで、だ

なんでそんな美人で頭もいい希咲が性格が多少似ていただけの俺と仲がそれなりに良かったのかというのだ、これもあいつの容姿、というよりも見た目が関係してた

確かにあいつは近寄りがたいレベルの美人だったけどそれだけだったからそれでも近づこうとしたりする奴がいただろうが、それだけじゃなかったんだよなあ

何と言うか、相手を睨み付けるような、それでいてやる気がないような、死んでいるような、全く活力とか覇気が感じられないダウンな目をしていて、しかも普段からデフォルトでムスツとした表情をして学校で生活してたから中学生の弱いメンタルでは話し掛けることすら出来る奴がいなかった

まああんな『世の中全部恨んでます』みたいな目をしてたら無理だわな、んで、長くなつたが俺と希咲がそれなりに仲が良かった理由っていうよりきっかけだな

そんなたいしたきっかけでもないんだが、あれだ、類は友を呼ぶ？
ってやつだな……友かどうかはわからんが

中一のとくにペアになつて作業をするっていう小学生かよとツッコミたくなる授業があつたんだが、希咲も俺も他のクラスの奴らがペアが決まっていくなかでぼーっとして気付いたら残りは俺らだけで、なし崩し的にペアになつた

……おい、誰だ？お前友達いないのかよって言った奴、逆に聞くが精神年齢が倍以上離れた奴らとどうやって仲良くしろと？俺にはめんどくさくて無理だ

話しがずれたな、って言つても後は特にすごいことがあつた訳でもない、ペアになつて若干話して、それなりに気が合つて多少普段から話すようになったってだけだ

希咲はあの年頃にある無駄にハイテンションって訳でもなかったから他の奴らと話すより楽だった、たまにドラゴンールのベツトとゴータのどちらが強いかな等のよく分かん話しにもなつたのだ

が……

あれはあれで面白かったから良かったけどな、とまあこんな感じの理由だな

中一から中三まで同じクラスだったからそれなりの頻度で話してたんだが……なんと言うか最近の中学生は違う方向でアグレッシブだったな、希咲が気になるけど本人に何か言う勇氣はない、だから俺に対して突っ掛かって来る奴らがたくさんいた、おかげで親に教えてもらっていた合気道の技がやたらと上達した

何回も諦めずに突っ掛かって来てたなあ、そのエネルギーを他のところで発揮しろと言いたくなかった俺は悪くない

しかも元凶であるあいつは俺がなんでこんなに絡まれてんのか全く理解してなかった……殴ってやろうかと何度思ったことが

希咲は自分の見た目に全く頓着しない奴だった、いや頓着しないというか理解してなかったな、あれは

中学生の中でも普段から話しかけていこうとするメンタルの強い奴はいなかったが思春期に入っただばかりの中学生だ、いきなり告白をするという勇者も居たには居たんだが、希咲は全て斬って捨ててた

その上俺に、なんでぼくに告白なんてするんだろっ、頭でも打ったのか？とウンザリとした表情で言ってくるのだ

一度、真剣に理由が分からんのか？と聞いたんだが、分からないから聞いてるんだよ、と返された……告白した奴が誰か知らんがかわいそうだったな、というかそんな話しを唐突にするなよ、誰かに聞かれたらかわいそうだろうが、告白したやつが

鈍感ってレベルじゃなかったな、あいつは、そのくせ他人の容姿はちゃんと理解してるのだから訳が分からん

だから希咲は俺が突っ掛かって来られる理由が分からなかったようだった、はた迷惑なことに、別に希咲が悪いわけじゃないんだが、俺にばかり厄介事がきて理不尽だ

そこまで頭のいい中学でもなかったからこの学園にいる中学からの知り合いはほとんどいないのが救いだな

まあそんな感じの中学生を送り卒業つてときに希咲が引越すという話を聞いてもう会うこともほとんどないんだろっなあ、とか考えてたらこの様だよ

ここの学園には植野っていうイケメンで希咲に話しかけられる奴もいるから関わらなければのんびり平穩に過ごせんだろ……多分、お

そらく、きつと、M a y b e

俺は校長の話を右からすら入れずにシャットダウンしながらそんなことを考えていた

……校長、話し長すぎだろ

いけめんくんどうあいつか……ふじつにすこせぬよな？……（後書き）

どうでしたか？楽しんでもらえたなら幸いです（^^）

もう一つの作品の悠夜とは少し違う感じになりますますがそういう仕様なので気にしないで下さい（^- - ^-）

めんどくさがりなのは代わりませんけどね（笑）

よびな、ねえ……どうでもよくな？……（前書き）

い 久しぶりの上に短いというのですが、心の広い方見てやって下さ

どーぞ

よびな、ねえ……どうでもよくな？……

ああ、やっと終わった。あのおっさん、話し長すぎる。1時間半は話し続けてたし、後半なんか誰も話し聞いてなかったからなあ。

…… まあそれが普通か。俺？ ずっと寝てたけど何か？ で、バカみたいに長い校長の話しも終わって、ついでにHRも終わった。そして今はクラスの奴らで親睦会みたいなやつをしよう、って話になってる

もちろん発案者はイケメン君こと植野君だ。まったくめんどくさいことをしてくれる。

「悠夜も来るだろ？」

植野がキラッキラした爽やかな笑顔で聞いてくる ……めんどくさいからやんわりと断るか。

「めんどくさいからパス（ダルいからパス）」

「悠夜、建前と本音が逆になってる」

「……しまった、間違えた」

「いやいやいや、どっちにしても理由としては最悪の部類だから！」

俺が建前と本音を逆に言ってしまったのを希咲につっこまれた。さらに植野もつつこんできたんだが、何で声に出してないのにつっこめるんだよ。……まあいつか。

「じゃあ、植野が嫌いだから行かない、でいいか？」

「そっだね」

「じゃあつてなんだよ、じゃあつて。俺、もしかして嫌われてる？」

植野が若干落ち込みながら聞いてきた。イケメンは落ち込んでてもイケメンだな。さっきから携帯やらカメラやらシャッター音がすごい。

てか、こんなに写真撮られてもスルーかよ、誰かつっこめよ

「大丈夫だ、俺はお前のことは寿司についてくるガリくらいには好きだから」

「……それって好かれてるのか？」

「俺の嫌いな食べ物top3に入るくらいだ」

「それって嫌われてるよな!？」

「……………」

「無言は止めてくれ!ちょっと、顔を逸らさないで!」

ふむ、植野はリアクションが大きいから、いじると楽しいな。めんどいのはパスだが面白いのは歓迎できる。……でもあんまり関わりすぎると今度は女子まで敵にまわしそうなんだよなあ

「悠夜」

「んー? なんだ希咲」

「植野? が泣きそうだから反応したら?」

希咲に言われて、植野を見てみるとちょっと涙ぐんでいた。そこまでのことかよ……

「まあ、植野はどうでもいいけどな。何で植野の名前が疑問系？」

ひどっ！？ と植野が声を上げるがスルーだ

「名前知らないし」

「自己紹介したよ！？ それに悠夜に名前言ったときにも希咲居ただろ！？」

自分の名前をキッチンと覚えられてなかったのがキツかったのか、半泣きだったのから一転、すぐさま希咲に詰めよった。希咲はダルそうな顔をしながら素早く距離を取り

「そうだったけ」

と、一刀両断した。あゝ今のはキツイなあ。植野が両手足をついてorzポーズを取ってるし

「……もう一回自己紹介しとけ」

あまりにも憐れだったので、俺はそう提案した

「……そうだな、よし！希咲！」

「うるさい」

「うつ、ごめん。じゃない、俺の名前は植野 春秋。春秋って呼んでくれ」

植野は希咲に声をかけたがソッコーで反論された、けれど植野はめげずに真剣な表情で自己紹介をした……何で自己紹介にそんなに気合い入れてんだよ

「植野で」

「春秋」

「植野」

「春秋」

すさまじく不毛な言い合いをかれこれ10分近くし続けて、最終的に希咲がめんどくさがって春秋と呼ぶことに了承した。……待たせてんだからとつと終われよ。植野はめちゃくちゃ嬉しそうだな。普通の奴が植野みたいな行動をとったら、ウザイ奴って認識されるんだが、植野がやったら様になる。周りもなんかほっとしてるとみただし。

……訂正、希咲の認識では植野はウザイ奴って位置づけのようだった。……訂正、希咲の認識では植野はウザイ奴って位置づけのようだった。……訂正、希咲の認識では植野はウザイ奴って位置づけのようだった。……訂正、希咲の認識では植野はウザイ奴って位置づけのようだった。

「じゃつ、俺は帰るわ」

「悠夜、ほんとに来ないのか？」

「行かない、用事もあるからな」

そっか、次は来いよな。と言って植野はさんざん待たせたクラスの奴らの方に行った。はあやつと終わった。うし、行くか

カタン、スタスタスタ

……で、椅子から立ち上がって学校から出てきたのはいいんだが、
なんで希咲まで来てんだ？

「……なあ」

「なに？」

「親睦会行ったんじゃないのか？」

「ぼくはちゃんと行かないって言った」

「いつ……ああ、俺が『植野が嫌いだから行かない』って言った後
にそついや言ってたな。『そつだね』って」

誰もわかんねえだろ、それは……めんどいし、どつでもいいか

「悠夜は用事って言ってたけど、本当はめんどくさかったただけだろ
う」

「ちゃんとした用事があるわ。家に帰るっていう用事が」

「……それなら仕方ない」

「そうだろ」

そんな感じでテキトーにダベリながら歩いていると、交差点にさしかかった。そのまま真っ直ぐに行けば俺の家につながる道で、希咲は曲がって少し行ったところらしい。希咲の家に向かう道は、少し進めばそれなりの大きさのデパートがある。

「悠夜」

「なんだよ、俺は疲れたから早く帰りたいんだが」

別れて帰ろうとしたら希咲が話しかけてきた。マジで帰りたいんだけど

「また明日」

そう言つて、希咲はいつもの不機嫌そうな顔を少しだけ口角をあげて、わからないくらい小さな笑みを浮かべて帰つていった。

また明日、ねえ。まためんどくさい生活に逆戻りかよ、はあ

俺はセルフでテンションを下げるという、意味不明な考え事をしながら帰路についた

面白いのは歓迎だけど面倒なのは勘弁だよ、ほんとに

よびな、ねえ……どうでもよくな？……（後書き）

マテリアルゴーストとクロスするとしたら、マテリアルゴーストの
面子は碧陽学園に行かせるべきか？ 悠夜は霊能力ありか、それと
も見えるだけにするか……どうしましょう（＾・＾；

ゆづれい、ねえ……（前書き）

短くて中途半端ですが

それでも大丈夫というかた

どーぞ

ゆづれい、ねえ……

幽霊つて、信じるか？

……別に宗教の勧誘とかではない。あなたは何が好きですか？
みたいな、特に何の意味もない、ありふれた質問だ。

ちなみに俺は信じてる。と言うか、見えてるから信じるしかない
つてのが正しいな。

幽霊が見えるつてのは、そこまでめずらしくないらしい。

視力みたいなもので、視力がいい人には視力検査の『C』がよく
見えて、悪い人には見えない、とかその程度のことだと聞いた。

俺はたまたま？ その幽霊が見える。つまり、幽霊に対する視力
がいい方に入るそつだ。

聞いた相手は……できればスルーしたかった相手だ、色々な意味
で。

さっきの視力云々の説明も、妹が分かりやすくまとめていた。

と無表情なんだが、どこか嬉しそうに言ってきた。……聞くつも
りはなかったんだが、無理やり聞かされた。

妹さんとの仲は良くないらしい。

……話を聞くかぎり、あいつが悪い。性格つて言ったらそれまで
なんだが、妹さんのことを考えての行動やら言動なんだろうが。

……いちいち言い方が悪いんだよ。そのせいで姉妹仲は微妙にな

ってる。そのことに関して愚痴ってきたりもする。めんどくさい」とい。

ああちなみに、そいつの職業は巫女さん兼学生だ。学校は……どこに行つてんだったか？ まあいいや。

それで幽霊とかが見えるとさ、たまに憑かれてる奴とかがいるって分かるんだよ。

禿げたオツサンの後ろにデブなオツサンが憑いてた時は焦つたな。いったい何があつたって聞きたかつたな。

話がそれだな。

まあ要するにだ。はたから見たら、頭おかしいんじゃないの？

て、言うような行動をとつてる中学生を見ても、だいたいの事情は分かるってことだ。

黒い塊（つてか悪霊だな、見てて気分が悪くなるし）を前に痴話喧嘩？ をする中学生の男の子とその中学生と同一年くらいの幽霊……？

なんかちょっと普通の幽霊と違うような気が……気のせいだな、うん。めんどいしそれでいいや。

ちなみに、幽霊が見えない人からしたら、中学生が何も無い空間に話しかけてるようにしか見えない。どう見ても怪しい奴だ。

……関わりたくないんだが、あっちの悪霊さんは俺に気づいてるみたいなんだよなあ。

はあ、駅に結界が張られてる時点でおかしいとは思ってたんだけどさ、とつとと帰ってたから、結界無視して入ったら、結界を張ったと思わしき中学生の女の子と……俺の卒業した中学の後輩がいたんだよ。

何でお前がいるんだ、と聞きたかったが、あの後輩と関わるとめんどくさい事になる可能性がかなり高い。この前なんかウソかホントか知らないが、連続殺人事件を解決したとかなんとか言っていたし。……あり得ないと断定できないのが嫌なところだ。

そんなやつが結界なんかを張ってる駅にいるんだから、絶対に厄介事だ。

だから俺は、俺を認識しにくくなるシスコンの巫女に教わった術を使い、一応、隅っこの方を歩いて駅のホームの奥に向かった。

で、ちよつと行ったら悪霊プラス絶賛、痴話喧嘩中の中学生&mp・幽霊がいたというわけだ。

……結構余裕だな、こいつら。

「ああもう！ ユウ、とりあえず逃げるぞ！」

「え、え？」

どんな展開か知らないが、逃げることにしたみたいだな。幽霊の女の子がテンパってるが、その手を引いて（・・・）こちらに向かってくる。

……何で触れてるんだ？ 男の方は幽霊じゃないのに、幽霊に直に触れてる……霊体に対して、見たかぎりでは札も術もなしに物理干渉ができるってことか。すごいねえ。

あん？ 感想が軽い？ そんなもん、慣れだ慣れ。いちいち反応してたら疲れるし、めんどくさい。

それに転生？ なんかがあるんだから気にするだけ無駄だ。

ゆづれい、ねえ……（後書き）

口調がいまいち分からない（泣）

これは今さらですね（^- - ^-）

アンケート、というかなんというか、深螺さんなんですが

……悠夜の二つ年上か同じ年のどっちがいいですかね？

紗鳥さんを1個下にしたら年齢的に3つ上なので、本来なら悠夜の二つ上なんですよね〜。

でもそれじゃ絡ませにくいし……間違っていたらすみませんm（

ー）m

良ければご意見を下さい。

中途半端の理由にこれもあります……言い分けですね（泣）

ほんど、めんざくわい……（前書き）

お久しぶりです（……）

このような拙作を待つて下さっていた方がいるかはわかりませんが、遅くなりすみませんでしたm（——）m

今回は作者のリハビリも兼ねているので、違和感があるかも知れませんが、温かい目で見えてやって下さい。

では

どーぞ

ほんとう、めんざくわい……

「で、中学生君。何であんなのに追われてんだ？」

「今はそんなことより逃げないと！」

悪霊から逃げてきた中学生君 + 幽霊の2人組と俺は、なし崩しで一緒に逃げている。疑問に思ったことを聞いてみたが、答えをもらえなかった。

中学生君達がこちらに向かって来ていた時から嫌な予感がしていたが、案の定巻き込まれたよ。

スルーしてくれるかなあ、とか思っていたら、幽霊の女の子が俺に気づいて、中学生君にも見つかってしまい。ただいま絶賛逃亡中だ。

やっぱりあの術は幽霊には効きづらいのか？ それとも女の子の霊がおかしいだけか…… まあいいや。めんどいし。

中学生君は切羽詰まった様子で、必死に状況を誤魔化しつつ説明して、どうにか俺を帰らせようとしていたので、「あれから逃げんのか？」と聞いた瞬間、問答無用で腕を捕まれてダッシュに移行させられた。

別にほっといてくれても大丈夫だったんだが。

「で、どこに行くんだ？ 階段の方はシャッターを閉められてるんだが？」

掴まれていた腕を外し、問いかける。あの悪霊はなかなか強力なようで、駅員を操り、構内に続く階段のシャッターを閉めやがった。はあ、シスコン巫女ならあっさり倒してくれそうな相手なんだけどな。……無い物ねだりをしてもらえないか。

「あそこに行きます。ユウ！ 先に行って中に入れてくれ」

そう言って中学生君が指し示したのは、メイン階段の脇にある非常階段だった。鍵かかっているとと思うんだが……。

「無理だよ！ あそこは明らかに鍵がかかって……」

俺が思ったことを幽霊の女の子が代弁してくれた。けれど、中学生君は走るスピードを緩めずに非常階段の方に向かう。

「だからユウの出番だろ？」

「え？」

「先に行ってドアをすり抜けて、あっち側から鍵を開けてくれ」

「……あ。……うん！ やっぱり無理だよ！ 私はすり抜けられるけど、鍵に触……」

「お前がドアをすり抜けたら、僕がすぐにドアに近付く」

「それがなに って……そうか！ 二メートル範囲！」

……なんか俺空気だな。にしても二メートル範囲？ 俺が首を傾げている間に、中学生君は一旦止まり、幽霊の女の子は少し進むとフワフワと浮遊してドアをすり抜けた。直後、中学生君は一気にドアまで駆け寄った。

すると向こう側からガチャガチャという音が聞こえてきた。

…… 本人だけが霊体に物理干涉できるようになるタイプじゃなくて、本人の周りの空間にいる霊体まで、物理干涉できるようになるのか。凄……い……のか？ よく分からんな。

さっきの話を聞く限り、中学生君から半径二メートルが能力の範囲か。…… ああ、だから追われてんのね。納得。

悪霊つてのは人間が持つ、負の感情が強かった生物がしばしばなるもんで、他殺とか自殺の霊が多い……らしい。

で、悪霊は常に怒りの発散場所を求めているから、人に悪さをすることが多い…… そうだ。けれど、霊体では出来ることが少なく、せいぜい幻覚見せたり、体調くずさせたり、多少意識をのっとる……としかできず、ストレスがたまる一方で、そのストレスを発散するために色々して……。無限ループに陥る……だって。

……全部聞いた話だから詳しくは知らん。ごくごくたまーに、生きてる人間に憑依して無理やり自殺させることができる、力の強い悪霊がいたり、それよりも強力で質の悪い《完全憑依型》とかいう悪霊が存在するそうだが、まあ今は関係ないな。

大分話がそれたな。結局何が言いたかったのかと言うと、だ。

中学生君は絶好のストレス発散相手になるってことだ。

ちまちま嫌がらせのようなことではなく、直接危害を加えることができる存在。あの物理干渉能力は、任意じゃなくてオートっぽいから、干渉相手の取捨選択ができないんだろ、多分。

餓えたハイエナに、生肉をぶら下げて近付くように。

砂漠をさ迷っていた人間に、水を見せびらかすように。

悪霊どもは血眼になって襲いかかってくる。

自らの手で殺す。

そんな極上の餌を狙って。

今ストーキングしてきている悪霊は、憑依ができるレベルのそれでも十分強い、ってかめんどくさい 強さを持つてるんだっ
たか？ 《中にいる》とか噂になってた奴だろ。自我もすっかりし
てる……そら狙うわな。目の前に餌がいるんだし。

と、少しシリアスな感じで言ってみたが、要するにサンドバッグ
がわりに使いたがってるってことだ。

……にしても、さっきからガチャガチャという音は聞こえるが、
ドアは一向に開く気配はない。

後ろからは悪霊がどんどん近づいて来てるんだが……。

「ユウ！ なにやってるんだよ。早く開けてくれ！」

「そ、そんなこと言われても、この鍵鑰び付いてて開かないよ〜！」

中学生君が焦りながら声をかけるが、返ってきたのは涙声の文句だった。

はあ。メンテナンスくらいしっかりしとけよ、駅員。めんどくさいなあ。

「中学生君」

「何ですか？」

内心のイラつきを抑えるように、息を吐きながら、中学生君は俺の声に反応する。

「幽霊に触れるようになるのは、中学生君から二メートル範囲内なんだよな？」

「え？ あ、はい。そうです」

何で知ってるんだ？ みたいな顔をしているが、あんだけペラペラ喋ってたらだれでもわかるっつーの。まあ緊急時なので、説明はスルーだ。

さあ、もう鬼ごっこは終わりだ

悪霊が、抑えきれない愉悦の感情を言葉に含ませ、中学生君に飛びかかるうとしている。

「くそっ」

中学生君は危機的状況にも関わらず、その目には諦めという感情は籠っていない。

俺は悪霊が中学生君に飛びかかり、二メートル範囲に入った瞬間。

俺は足首、膝、腰と体の力を順番に力を伝え、さらに相手の向かってくる力を利用し、悪霊の顔面と思われる部位に上段蹴りを決め

る。

「めんどくさいんだよ、糞やろう」

があッ!?

グシャ、という人を蹴り飛ばした時とは微妙に違う感触と共に、悪霊は結構な距離を飛んでいった。ざまあみる。しっかしダメージは通つてんのかね。もしノーダメージだったらめんどいな。

なんか気持ち悪い感触の残る右足をぶらぶらと振りながら嘆息する。さすがにあれを素手で殴り飛ばすのはごめんだ。気持ち悪いし。

「あ！ 開いたっ！！ ケイ、鍵開いたよ」

丁度いいタイミングで、幽霊少女が扉を開いて出てきた。もう少し早く開けて欲しかったんだけどな。心底驚いたという感じの表情をこちらに向ける、中学生君を引きずりながら扉の方に移動する。

ほんと、めんどくさいことになってんな。

線路からでも逃げられたんじゃないか……気にしないでおうっか。

ほんど、めんざくわい……（後書き）

なかなか《中にある》の話が終わらない（泣）

また期間が開くかも知れませんが、気長に待っていて下さると嬉しいです（^^）

ではまた次回ノシ

あくりょじうたいじい？ 危なせうてへね……（前書）

短いです。

あくりょうたいじ？ 他でやってくれ……

「……あれだな、中学生君は地味に性格悪いな」

「……私もそう思う」

非常階段を登りながら、さっき見た中学生君の行動についての感想を言う。幽霊少女も同意見のようだ。それに対して中学生君は華麗にスルーを決め込む。

ちなみに、さっきの行動というのは、ドアのカギを開け中に入っ
て直ぐに、中学生君がまたドアを閉めてカギを掛け、背中をピタリ
と付けた。その後、俺の蹴りを食らって怒っていた悪霊がドアに突
つ込み 激突した。

霊体物質化効力範囲を使った良い作戦なんだが……なんか、ねえ。
性格悪いな、と。

そんなことを考えているうちに、駅の構内に戻って来たのだが、
利用客どころか駅員すらいない。ふむ、結界自体は解除されてる
な。術者が強制退去でもくらって、結界を維持出来なくなったかな。
後輩のアイツもいないし。

……なかなか面倒なことをしてくれるなあ、おい。

と、唐突に中学生君の辺りから、携帯のバイブレーションの音がする。中学生君はすぐに携帯を取り出すが、一瞬怪訝な顔をして、ディスプレイを確認し　一気に顔をしかめた。

親しい知り合いからの電話、って訳じゃなさそうだな。中学生君は暫くディスプレイを見つめた後、電話に出た。

「もしもし」

「あつそ。実況は勝手だが、僕の中に入るエンディングは変更することになるぞ？　なんせ僕に憑依は無理だからな」

……話の内容が全然分からん。通話相手が悪霊っていうのは分かるが、まあ他人の通話なんざさういうもんだよな。内容が分かっただら逆に怖いし。

中学生君がケータイを耳から離し、見つめる。どうやら通話は終わったようだが、何かを考えているようで、こっちを見ない。帰りたいんだけど、まだ終わらないのか？

「ねえ、どうしたの？」

痺れを切らした幽霊少女が中学生君に問いかける。中学生君はそれに対して、淡々と応対した。

「ああ、意味のない現状報告だよ。階段から悪霊が上がって来てるっていう現状が知れただけ。……結構ダメージ受けたはずなのに、よくもまあくだらないことを……」

そこまで言って、中学生君は肩をすくめ溜め息を吐く。……ダメージを受けてるのは確かだが、わざわざ階段を上がってるって教える意味があるか？ プレッシャーを与えるため？ それなら急に現れた方が余程建設的だ。悪霊がアホなら別だが。

「ねえ、気付いてる？ ケイ……。駅の出口、全部閉まっちゃってるよ……」

幽霊少女が何か言ってるが、取り敢えず無視。出口の封鎖なんか、予想範囲内だし。まあこれで、悪霊アホ説は消えた。それなりの知性を持つてるんだろ。今居るのは構内の中心近く、辺りを見回しても、悪霊が突っ込んで来たら確実に気付ける程度には広いことがわかる。

これで前後左右からの奇襲は無理。次に下だが、これは中学生君の二メートル範囲の効果があるから真下からの攻撃は不可能だ。二メートル外からの強襲なら別だが。てことは、残るは

「悪いな」

「えっ？ うわっ!？」

「へっ？ きゃっ!？」

中学生君を蹴り飛ばし、幽霊少女は突き飛ばす。似たような声をあげてるが、今は関係無い。二人を飛ばした瞬間に後ろに跳ぶ。

ドンツ! と 実際はそんな音はしなかったが 悪霊が上から落ちてきた。やっぱり、奇襲狙いだったかよ。……こついう時は、中学時代に感謝だな。木の上やら池の中やらから襲いかかって来てた、希咲ファンの奴らのおかげ……で、奇襲にはなれてる。

慣れたくなんざ無かったんだがなあ。はあ。

チツ、余計なことを

「それはそれは、ザマア見ろ」

悪霊がイラつきながら言ってくるが、それはこっちのセリフだつての。慇懃な態度で皮肉を言ってる。奇襲にはそれなりの自信が

あつたよつで相当キテるよつだ。　つて、ヤバい。中学生君が転けてる。そんなに強く押したつもりは無かつたんだが、突然だつたから踏ん張れなかつたか。

だが、甘かつたなあ！

「……う……あ……」

中学生君の状況に気付いた悪霊が飛びかかり、中学生君を地面に押し付け、中学生君が苦悶の声を漏らす。

「……ケイ！」

突き飛ばされ呆然としていた幽霊少女が、ハツと気付いたように悪霊を引き剥がそうと駆け寄る。　アホか！　んな正面から近付いたら。

邪魔だ

悪霊が煩わしそうな声と共に腕をなぎ払つ。

「おやめー」

幽霊少女は通常じゃありえないほどの勢いを伴い、悲鳴をあげながら吹っ飛び、二メートル範囲から弾き出されて、構内の柱をすり抜けて行った。今のはちょっと不味いな、ダメージがでかすぎるだろ。

「……………う」

中学生君が声を出そうとするが、喉を押さえつけられているのか、発声出来ていない。

ヒヤハハハハハハハハハハ！

気色の悪い声が脳内に伝わってくる。鬱陶しい。

「周りをちゃんと確認しろや」

中学生君を押さえつけている腕を横からへし折るように蹴りつける。同時に、中学生君がポケットから取り出したカッターナイフで悪霊の腕を切り付けた。

ぐっ？ ぎいあああああああああ！

瞬間、悪霊の絶叫が脳内に響きそうになるが、ある程度干渉をシヤットアウトすることでやり過ごす。多少シスコン巫女に感謝だな。悪霊に関節があるのかどうかは知らんが、割りと効いたようだ。悪霊はドクドクと黒い血液のような霊力を垂れ流す。

……どうでもいい話だが、中学生君は普段からポケットにカッターナイフを忍ばせている、いわゆる危ない奴なのだろうか。だとしたら、怒らせないようにした方がいいな。地味に性格も悪いようだし、怒らしたら夜中に後ろから刺して来そうだ。

「ケイ……！」

ヨロヨロと幽霊少女が中学生君に近付いて行く。……二メートル範囲から離れると、外的損傷は回復するのか。霊力は削れてるみたいだから、ぶつちやけ帰って来ないでくれた方がありがたかったな。

ぐあああああ……

悪霊は回復の事に気付いていないようで、床に這いつくばり苦悶の声をあげている。まあ、悪霊になってから《痛み》なんか感じたことはないだろうからな、当然の反応だ。……殺るなら今のうちだな。

「中学生君、今のうちにそれで止めを刺した方がいいぞ」

「……はい」

俺の言葉に中学生は今一反応を示さない。……苦しむ奴に攻撃するのが嫌なのか、殺すのが恐いのか（この場合は消すか？）どっちにしる優しいねえ。俺がカッターナイフを借りて、殺るのがいいかな。……事情説明がめんどくさくなりそうだが、俺はとっとと帰りたいんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8696t/>

碧陽学園ね.....めんどくさい

2011年12月18日01時47分発行